

## 逝去された名誉会員等への追悼文

### 思いで学んだ西 三郎先生



1927年 1月11日 東京都生まれ  
 1950年 成城学園成城高等学校高等科理数卒業  
 1954年 千葉大学医学部卒業  
 1959年 千葉大学大学院医学研究科博士課程修了（公衆衛生学専攻）  
 1959年 国立公衆衛生院 衛生微生物学部勤務

1963年 同院 衛生行政学部衛生行政室長  
 1983年 同院 衛生行政学部長  
 1985年 東京都立大学 人文学部教授（社会福祉行政論講座担当）  
 1993年 愛知みずほ大学教授 人間科学部長  
 1996年 田原町立田原福祉専門学校長（兼務）  
 1999年 東海大学教授  
 2001年 退職

名誉会員西 三郎先生が、平成24年11月23日に、享年86才でご逝去されました。衷心より哀悼の意を表します。

先生は昭和34年に千葉大学大学院医学研究科博士課程を終了後ただちに国立公衆衛生院（現在の国立保健医療科学院）の衛生微生物学部で勤務を開始されました。20年余り衛生行政に関する教育研究に従事された後、東京都立大学に新たに開設されることになった人文学部の社会福祉行政論講座担当の教授として転出され、そこでご定年を迎えられました。定年後も、愛知みずほ大学そして東海大学で教授として衛生行政分野に係る人材育成に多大なご貢献をされました。これら教育研究機関でのご勤務を終えられた後も、それまで係ってこられた多方面の社会的活動に引き続き精励されました。学究の世界のみならず、衛生行政の現場さらにはお住まいの地域の健康福祉施策に係る活動にも大きく貢献されました。

多岐にわたりご指導いただいた西先生の追悼文を書く機会に恵まれ、先生の生涯を振り返り、そして思う時、私には孔子の「学びて思わざれば則ち罔し、思いて学ばざれば則ち殆うし」の言葉が浮かんできます。

先生は、常に市民の生活の場や医療福祉行政スタッフの現場に足を運ばれました。そしてそれぞれの課題の解決にも助言だけでなく自ら係られることも多く、現場で指導を受けた方々は全国に多数おられます。まさに現場で思いで学ばれた先達でした。先生に北陸（石川県）の血筋があったのでお会いした当初から親近感を持ちましたが、しばしば訪れた公衆衛生院、学会や研究会でのお話や地元での市民活動、さらには私たちの著作に関するアドバイスなど

を通じて敬愛の念が一層つのりました。

このことは私の単なるひいきではありません。例えば、都立大学に新しく社会福祉学教室（社会福祉行政論講座）の開設に当たり教員を人選していた星野先生（東京都立大学名誉教授）たちは、この講座の狙いとして、社会福祉の対象者理解に一つのポイントを置いておられました。そのおめがねにかなったのが、公衆衛生院で衛生行政学部長だった西先生でありました。まさにぴったりの人選だったと思います。

私が教授に就任した際に、「あなたは地域で何かしていますか？」と尋ねられたことがあります。学校、職域、地域に出向いて種々の調査研究を行ってきたので、ちょっと返答に困りました。しかし、質問の趣旨は分かったので、「町内の仕事をしています。」と答えました。その時、先生は、自分の居住地で具体的に世話をやいていない公衆衛生学者はリスペクトするのに躊躇すると言われたのを今も脳裏によみがえります。

先生は、地元の三鷹市でも専門の分野以外でもいろいろとお世話をされていました。三鷹市市民協働センターに係わり地域の組織づくりとその運営にも貢献されました。市民からも敬愛された先生は、昭和61年には三鷹市長より「障害児の福祉向上に貢献」で感謝状を受けられています。

先生は公衆衛生行政サービスの受け手側の思いから衛生行政の在り方を追究され行動されてきました。ご著書にもある通り、難病患者、腎透析患者、要介護高齢者の皆さんのなかに入り実際に感じたことと思われたことに立脚して施策の展開を説かれました。

富山県の保健所では難病患者さんたちの福祉施策の国のモデル事業に相当の期間継続的に取り組みましたので、先生には何度も当地に来ていただきました。これらのことも難病患者の在宅支援やQOL向上の施策の展開に繋がったと思っています。

先生は、後進たちの話をお聞きになると、温かな笑顔そして独特の声と言ひ回して「そうね！」とよく相槌を打ってお聞きになりました。教示的よりは受容的な公衆衛生の先達として、多くの後進を受容し支えそして育成されました。まさにこの面で、「公衆衛生の母性」と言っても過言ではないと思います。

新盆に、奥様から毎日のように墓前に行ってお話しているとお便りをいただきました。先生と交誼のあった全国の方々も、思いで学んだ先達を偲んでこころの会話をされていると思います。先生長い間お疲れさまでした。ご指導本当にありがとうございました。

富山県立イタイタイ病資料館長  
 富山大学名誉教授

鏡森定信

## 宮坂忠夫先生を偲んで



1922年 9月10日生  
 1946年 東京大学医学部医学科卒業  
 1947年 厚生省公衆衛生局保健所課技官  
 1953年 ハーバード大学公衆衛生学部大学院卒業  
 1957年 国立公衆衛生院行政学部衛生教育室長

1967年 東京大学医学部保健学科教授  
 1983年 女子栄養大学教授  
 1983年 東京大学名誉教授  
 1991年 女子栄養大学教授，副学長兼任  
 1993年 女子栄養大学副学長

日本公衆衛生学会名誉会員 宮坂忠夫先生は、昨年5月から入退院を繰り返されていらっしやいましたが、薬石効なく平成25年7月11日未明ご逝去されました。享年90歳でした。ご葬儀は、先生のご遺志により御家族のみでお済ませになり、私どもが先生の訃報を知りましたのは、7月29日御遺族様からのお手紙によってでした。先生のご冥福を心からお祈りする次第でございます。

先生の日本公衆衛生学会でのご活躍は、昭和41年から評議員をお続けになり、その間昭和59年から62年8月、平成2年9月から5年8月まで理事をおつとめになりました。また、日本民族衛生学会でも活躍されました。さらに日本健康教育学会理事長を平成3年から17年まで、そして、特定非営利活動法人日本健康教育士養成機構理事長を平成14年から22年まで務められました。

先生は、大正11年9月10日にお生まれになり、終戦翌年の昭和21年9月に東京大学医学部医学科を卒業され、昭和22年に厚生省公衆衛生局保健所課に技官として入られました。当初から当時アメリカから導入されました Health Education (衛生教育) の考え方に興味を持たれたと伺っております。昭和27年、ハーバード大学公衆衛生学部大学院に留学し、Health Education を専攻され、Master of Public Health を取られました。帰国後厚生省に戻られ、まもなく、わが国における健康教育の実験研究を構想されたのだと思います。公衆衛生学、社会学の先生方とグループをつくり、埼玉県旧千代田村において、昭和31年9月から昭和41年9月までの10年間「健康農村建設事業」の活動を展開されました。これは、一種の実験研究であり、実験地区とよく似た状況のA対照地区を設定されました。昭和32年に厚生省から国立公衆衛生院(現・国立保健医療科学

院)の衛生教育室長になりました。公衆衛生院では、特に都道府県の医師・保健師をはじめその他の保健従事者に対して衛生教育の考えの普及に尽くされ、都道府県保健所の衛生教育係で勤務する人材養成のための1年コースをつくられました。その後医学博士の学位を取られ、昭和42年8月より、改組間もない東京大学医学部保健学科の保健社会学教授に就任されました。先生は就任まもなくから課程主任、学科主任を昭和50年までお続けになり、その間学園紛争への対処などにも悩まれましたが、保健学科になくてはならない存在になりました。保健社会学教室には、昭和43年4月から地域社会学者の園田恭一先生(故人)を助教授として迎えられ、保健社会学の樹立を目指されました。大学院で保健社会学を学びたいという学生も多く、院生室はかなり賑やかでした。昭和58年3月定年退職をされ、東京大学名誉教授になりました。昭和58年4月女子栄養大学に移られ、平成3年からは副学長になられ、女子栄養大学並びに大学院の充実に尽くされました。平成11年5月には勲3等旭日中授賞を授与されました。

先生は一貫して健康教育(以前の衛生教育)の研究及び実践にあたられ、多くの人材を育てられました。

先生の関わられた研究は沢山ありますが、主な研究を私の知る範囲であげさせていただきますと、①埼玉県旧千代田村における健康農村活動の研究、②Community Organizationの研究、③住民参加の研究、④糖尿病患者教育だと思えます。

埼玉県旧千代田村における健康農村活動の研究は、公衆衛生学と社会科学の接近的研究を志向し、健康教育に重点を置き、村民の自主的な保健活動の育成と農業の共同化を直接の目的とした10年間のアクションリサーチでした。村の通常の衛生行政ルートを大事にし、研究班は評価活動にあたりました。

Community Organizationの研究は保健学、社会学、社会福祉学の研究者で研究会を組織し、文献研究、事例調査、住民を対象としたアンケート調査から結果・考察を導きだしました。

住民参加研究は、当時政治学、行政学、社会学の分野で行われていましたが、地域保健における住民参加は、地域の保健医療専門家集団の参加と同時に考えることの重要性を特徴としていました。折しも、WHOのプライマリ・ヘルスケアに関するアルマ・アタ宣言が出た時期でした。

糖尿病患者教育については、疾病構造の変化に伴う生活習慣病の予防は、重要な課題であり、糖尿病学者、臨床医・看護師・栄養士の方々との共同研究を通して、あるべき糖尿病患者教育を模索しました。

和歌山県立医科大学特任教授

元東京大学医学部保健学科教授 川田智恵子

## 三好 保先生を偲んで



1929年 5月12日生  
 1955年 徳島大学医学部医学科卒業  
 1956年 徳島大学大学院医学研究科  
 1960年 名東郡国府町名東病院産婦人科医長  
 1961年 徳島大学医学部公衆衛生学助教授

1975年 徳島大学医学公衆衛生学教授  
 1995年 徳島大学名誉教授  
 1996年 四国大学教授  
 2003年 四国大学名誉教授  
 2011年 瑞宝中綬章  
 2012年 1月16日 ご逝去

日本公衆衛生学会名誉会員、徳島大学名誉教授の三好保先生におかれましては、しばらくご自宅でも療養されておられましたが、平成24年1月16日に82歳でご逝去されました。先生がとても誇りにされ、頼りにされていた徳島大学病院で最期は看取ることができて良かった、とご家族よりお聞きしております。

三好保先生は徳島大学医学部医学科を昭和30年3月にご卒業し、インターン終了後、公衆衛生学講座(大学院医学研究科)に入学し、研究とともに産婦人科の臨床もされておられました。昭和36年10月に徳島大学医学部公衆衛生学講座の助教授、昭和50年7月に教授に就任されました。フィールドワークから出発した疫学、環境保健、食と環境に関するものなど様々なご研究と公衆衛生学の教育にご活躍されました。また社会的活動として県市の組織への活動に識者として協力し、地域の学術、文化の向上に貢献されました。

学会活動としては、日本公衆衛生学会、日本産業衛生学会、日本衛生学会、日本栄養・食糧学会、日本民族衛生学会、日本プライマリ・ケア学会、四国の各学会の重鎮を長期間務められました。特に平成2年第49回日本公衆衛生学会、平成4年第65回日本産業衛生学会を学会長として主催し、教室にとって徳島にとって、大変重要な役割を果たされました。

多くの医学生と公衆衛生人を育てられ、平成7年に徳島大学をご退官の後も四国大学で教授を務めておられました。長年の功績に対して平成23年春の叙勲において瑞宝中綬章を受賞され、同門一同、とても喜んでおりました。それからそれほどの時間も待たずに受け取った訃報でした。

ご葬儀の時のスライド映写から、聡明なご令室や家族の皆様をどれだけ大切にされていたか、特にお子様たちへ注がれるまなざしから、その優しさは特別であったことを拝見することができました。産婦人科医でもあったためと思っておりましたが、院生時代の私に対して、妊娠期をかばってくださったり、子どもへの授乳時間に理解をくださったりした優しさとはまた別の、失礼ながら「好々爺」としての面を初めてみた想いでした。

三好先生にとって一院生だった自分が追悼文を書くことに対して、本当に恐縮しております。本来ならば、当時のスタッフの先生方、とりわけ三好先生が将来を期待しておられた今木雅英先生が想いを込めて書かれるはずでした。今木先生は三好先生ご教授時代に徳島大学公衆衛生学教室の講師として活躍され、体格人格ともに大きな方で、2つの全国学会にも三好先生を助けて尽力されました。大阪府立大学総合リハビリテーション学部長として頼りにされている中、平成23年11月1日に急逝されました。公衆衛生学教室(現、人類遺伝学分野)にとって、現役の教授である中堀豊先生が平成21年4月27日にご逝去され、その後の教室のことを心配していただき、皆に敬愛されていた佐野雄二先生(非常勤講師・徳島県医療健康総局次長)も同年9月2日に急逝され、悲しいことが続きすぎておりました。

今は、多くの先生方とも語り合っておられるでしょうか。

三好先生の医学生に対するご講義、特に「公衆衛生学序論」は威厳があり、深い歴史を感じるものでした。そういう風に「公衆衛生を語る」ことはとても難しいのだ、ということが今はよくわかります。

教室の名前が変わっても、公衆衛生の心は三好教授から中堀豊先生、井本逸勢先生へと引き継がれています。心からご冥福をお祈り申し上げます。

徳島県総合健診センター診療部  
 勢井雅子